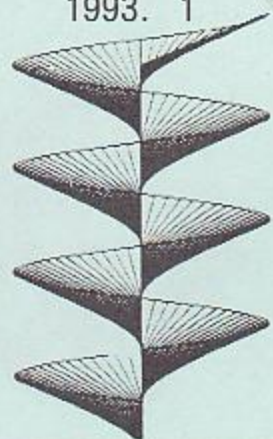


1993. 1



はるかにくす

No. 30

大阪工業大学図書館報

書を読みチャーム

一般教育科 助教授 深山晶子



最近、若者の間に、女性ばかりか男性にまで、美容整形が横行しているという。先日、その是非、その功罪をテーマに激論しているTV番組を見た。某映画監督が、金切り声を上げ、整形医を罵倒していた。彼の言い分はこうだ。

「顔の美しさに基準はない。それを、あたかも一定の基準があるかのように煽り立て、失敗頻出を承知の上で不必要な手術をし、金儲けに励む整形医の存在は許し難い」

確かに、美男美女の基準は、時代や地域や人種によって変わり、更に個人の主観によっても変わり、一定ではあり得ない。アバタがエクボになり得るのだ。そうであるなら、手術までして仮面の美を追うよりも、持って生まれた顔を魅力的にしようとする方が正解であろう。

ならば、いかにして自分の顔を魅力的にするか。その最重要ポイントは目である。一重瞼を二重にしても、目に知性のきらめきがなければ、顔に魅力は生まれぬ。顔の造作はどうであれ、目に知性のきらめきさえあれば、その目が磁力を放ち、顔に魅力を生む。

ならば、いかにして目に知性のきらめきを宿すか。その秘訣が、東大名誉教授、竹内均博士の某著に、名高き教養人、元慶應大塾長、故小泉信三氏の言葉を引用して、次の如く記されている。

「本を読んでものを考えた人と、全く読書をしていない人とは、明らかに顔が違う。その理由は、読書家が精神を集中して細字を見ることが、そ

の目に特殊の光を生ぜしめ、これが読書家の顔を作るからである。しかし、もっと大きな理由は、偉大な作家、思想家の大著を潜心熟読することは、人を別心たらしめるからである。つまり、偉人の最高の頭脳が考えた思想が自分の頭の中に導入されることによって、内面から変化が起き、顔つきもかわってくることになる」

文中、偉大な作家、思想家の大著とあることに、御注目されよ。例えば工科系の専門書などをいくら読んでも、近眼にはなるかも知れないが、顔つきはかわらない。偉大な作家、思想家の大著、即ち、精神の栄養となり得る書物を読み、自分という人間の器量を育てて頂かねばならない。必然、器量が育つのに比例して、知性も磨かれていく。人の器量とは、どれほど人間に通じているか、どれほど人間社会を理解しているか、どれほど人生を悟っているか、この三本柱に支えられて成立している。だから、それらの柱にスポットを当てた古今東西の名著を紐解き、そのエッセンスを吸収していく内に、目が知性のきらめきを宿し始めるのである。

ならば、どこで、人類の宝物にも等しいそのような書物と、容易に出会えるのか。その答えは、お察しの通り、本の宝庫、図書館である。大工大生諸君、自分の顔をチャームにしたいなら、まずは、フィットネスクラブへ行く乗りで、図書館へ足を運ばれよ。

この一冊の本が…

経営工学科 4年次 王子喜市



私は現在58歳、平成3年4月学士編入学で経営工学科3年次に入学しました。入学の動機は倉敷の図書館で読んだ一冊の本が、私の第二の人生を大きく変えさせた。

その題名は“大学へのもう一つの道”（創元社発行）で、この中に慶應義塾大学を卒業して銀行に就職し、定年を迎えられたUさんが、再び大阪工大に学士編入学し、2年間土木工学科で学び卒業されたことが紹介されていた。

私はこれを読んで、定年を機会にもう一度大学に戻って勉強することが出来れば最高の生きがいと考えました。サラリーマンがこの年齢になると第二の人生について色々と考えます。私は妻に自分の考えを話し、賛成を得て大学に行くことを決め、満56歳で子会社への移籍を機会に平成3年3月末日で会社を退職しました。

大阪での学生生活はマンションを借りての独身生活、仕事から解放され、時間的に余裕ができて図



書館をおおいに利用させていただき、レポート作成の参考資料探しに足を運びました。

このことにより、自分の探す本がどの辺にあるか憶えてしまった気がします。

人生は、人との出会いともいわれるが、本も人間と一緒に付き合い方によって良い友人でもあり、また自分の進むべき道を教えてくれる師でもあります。時間潰しに読んだ本でも内容から得た知識は、その人の中に深く沈澱し、いつか行動の判断の基礎になるかもしれません。

また、その本から得た感動・感銘、知識がその人の情操を深め人柄の形成にも役立つものです。

図書館はレポート提出の際の参考資料を貸出してくれるところだけでなく、種々の悩みするとき、解決の糸口を見出してくれるところでもあります。そのためには、こまめに図書館に通い、時にはせまく、時には大きく利用すべき学習の場であります。

早いものでこの2年間の学生生活が終わろうとしています。私にとっては最高の贅沢なりフレッシュ期間でした。卒業後また社会にカムバックして第一線で働くチャンスがいただくことができました。



『ひねくれ一茶』

田辺聖子著

(講談社)

“雀の子そこのけそこのけ御馬が通る”など多くの親しみやすい句で知られる小林一茶だが、その生きざまは俳句におとらず面白い。遺産争いや若い妻女への執心ぶりなど俳人らしからぬ逸話も多く、小説にはもってこいの人物だ。

にも拘らず、これまでそうした作品がなぜか乏しかった。その不可解ともいえる空隙をもの見事に埋めてくれたのがこの“田辺『一茶』”である。

悠々550頁に及ぶ大作は、しかし一気に読ま

せてくれる。読むからに、江戸の町並、俳句仲間との交歓、在所（信濃）での生きざまなど人間一茶の世界に引き込まれ、思わずタイムスリップをしたような心地にさせられる。

それというのも、この作品が一茶同様無類の酒好き、人好きで、かつ和歌俳諧に造詣の深い田辺氏という最適の人を得て、まさに書かれるべくして書かれた会心の作であるからだ。

読者はこの『ひねくれ一茶』を通じて、俳句の世界によりいっそう親しみを覚えるとともに、風雅を愛した人達のたしかに交友ぶりに心底羨望の思いを抱くに違いない。



(請求記号 913.6 T 第1図書室)

シリーズ 淀川ぶらり散策

第21話

「大阪の昔話」

浅井 三千治

今はすこし昔。

淀の河原を走り回る子供達がまだ、水鼻を垂らしていた頃のことである。

夕暮れが近づき、川面に夜の帳が降りる時分になると、どこからともなく子供達の唄うわらべ歌の音が聞こえてきたものだ。

「指にたりない 一寸法師 小さいからだに
大きな望み お椀の舟に 箸の權 (かい)
京へはるばる 上りゆく」

巖谷小波作詞、田村虎蔵作曲の「一寸法師」の歌は、明治38年10月から尋常小学校唱歌となって全国の子供達に歌われた。そして、毎夜、子供達は親から寝る前に、「むかし、むかし、あるところに……」と語り聞かされたものであった。

ところで、昔話とお伽噺とは、少し意味が違うらしい。

お伽噺というのは、本来お伽の役がする話であり、話す相手は子供ではなく、目上の人であった。「伽」という字は、折口信夫博士によると「ギャア」というような音で、暗闇の魔者を追い払うわざを表わすらしい。平家物語にも見られるように、昔、御所には、頭は猿で、胴は狸、尾は蛇で、手足は虎、声はトラツグミに似た「鶴(ヌエ)」という怪獣が、夜な夜な徘徊したというから、夜の闇は人々にとって恐ろしいものであった。戦国時代から江戸時代にかけて、お伽衆なる集団が、将軍や大名の側近として仕え、その孤独と無聊を慰めていた。その内容も婦女童幼むきのものではなく、武辺話や怪異談のようであったとされる。

一方、昔話というのは、「むかし」とか「むかし、むかし」の語で始まり、終わりに際しては、「どっとはらい」とか「いっちご・さっけ」

あるいは「しゃみしゃっきり」といった語で結ぶ形式の話で、本来は夜語られるものであり、昔話は、民間における神聖な夜語りであった。そして、これを破ることは「昼むかし」と称して、厳しくこれを戒め、忌み嫌ったということである。

さて、大阪の昔話であるが、大阪地方の場合は、他の地方と異なり、早くから近代化され都市化されていた。このような地方では、昔話の発生も少な

かったし、また社会の移り変わりとともに、消えていくのも速かった。

摂津と河内の境を流れる淀川の流域では、都のあった京とも近く、公卿や武士、商人の往来が多く、今に残る話には、このことと関係のある話が多い。

住吉大明神の申し子である、一寸法師が、お椀の舟に乗り、箸の權を漕いで京の都に上り、策をめぐらして宰相の姫を連れ出し、途中鬼を退治して、宝の小槌を手に入れ、その小槌によって背も伸び、美しい姫を嫁に迎え、堀川の少将としてめでたく栄えたという、一寸法師の話はその一つである。

そしてその他にも、「娘と狼」「茨木童子」「みそさざえとたか」「鉢かずき姫」「今宮の神輿かつぎ」「烏養の娘」「箕面の滝の中の月」「茨田の匏(ふくべ)」等々の昔話が、大阪の昔話として伝えられ残っている。

大阪の昔話

